

研究ノート

長崎における精神科医療の歴史

石田昇の足跡をたどりつつ

中 根 允 文

(長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科)

要 旨

いま、長崎県における精神科医療の展開に関する歴史を、長崎大学医学部精神神経科学教室の初代教授である石田昇の成果を中心に振り返りつつある。完成させるには今しばらくの情報収集が必要であり、その途中経過として、ここには研究ノートの形で紹介してみたい。現在、長崎県下には39ヶ所の精神科病院があり、総数で8,415ベッドが精神科疾患の患者のために準備されていて、入院患者数は7,059人である(図1)。彼等の平均入院日数は440.9日(図2)であり、利用率は83.5%(図3)になっている(いずれも、平成14年6月末現在のデータ)。長崎県の人口と比較したとき、ベッド数は万対55.2床(図4)、入院数は万対51.7人となる。全国の動向と比較したとき、全国でベッド数が万対28.0床、万対入院患者数が26.0人、そして平均日数は364日であり、いずれもその数値が大きく全国を上まわっている。

医療全体に関わる統計データで、西日本地区が東日本に比して全体的に高い数値をみており(病院数・病床数が多い、個人当たりの医療費が高いなど)、精神科医療では更にその傾向が顕著である。しかし、長崎は同傾向が更に著しくなっているのである。

いつの頃から、このような傾向が目立ってきたのであろうか。長崎の精神科医療に関するハードの面が充実していること自体は歓迎すべきであろうが、実際はその内容が問われるべきであることも事実である。ここでは、長崎県における精神科医療の全般について広く言及するゆとりはなく、まずはその展開に大きく寄与した故石田昇教授の足跡をたどりながら、若干の考察を試みてみたい。

キーワード

精神科医療、長崎、歴史、石田昇

1. はじめに

いま、長崎県における精神科医療の展開に関する歴史を、長崎大学医学部精神神経科学教室の初代教授である石田昇の成果を中心に振り返りつつある。完成させるには今しばらくの情報収集が必要であり、その途中経過として、ここには研究ノートの形で紹介してみたい。現在、長崎県下には39ヶ所の精神科病院があり、総数で8,415ベッドが精神科疾患の患者のために準備されていて、入院患者数は7,059人である(図1)。彼等の平均入院日数は440.9日(図2)であり、利用率は83.5%(図3)になっている(いずれも、平成14年6月末現在のデータ)。長

崎県の人口と比較したとき、ベッド数は万対55.2床(図4)、入院数は万対51.7人となる。全国の動向と比較したとき、全国でベッド数が万対28.0床、万対入院患者数が26.0人、そして平均日数は364日であり、いずれもその数値が大きく全国を上まわっている。

医療全体に関わる統計データで、西日本地区が東日本に比して全体的に高い数値をみており(病院数・病床数が多い、個人当たりの医療費が高いなど)、精神科医療では更にその傾向が顕著である。しかし、長崎は同傾向が更に著しくなっているのである。

いつの頃から、このような傾向が目立ってき

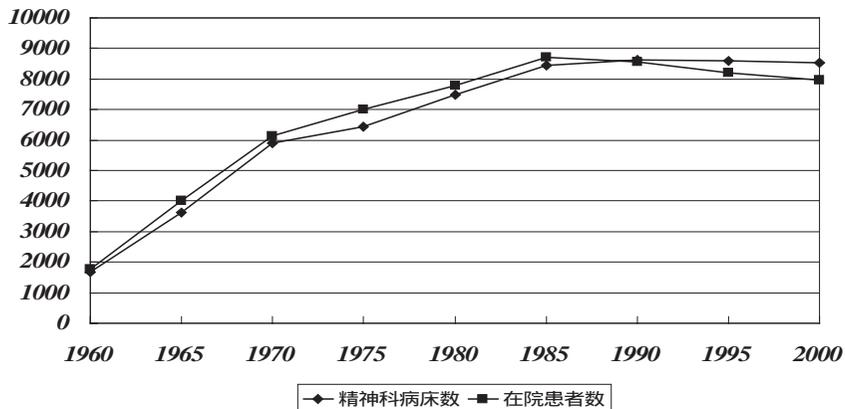


図 1 長崎における精神科病床数と在院患者数 1960年以降の推移

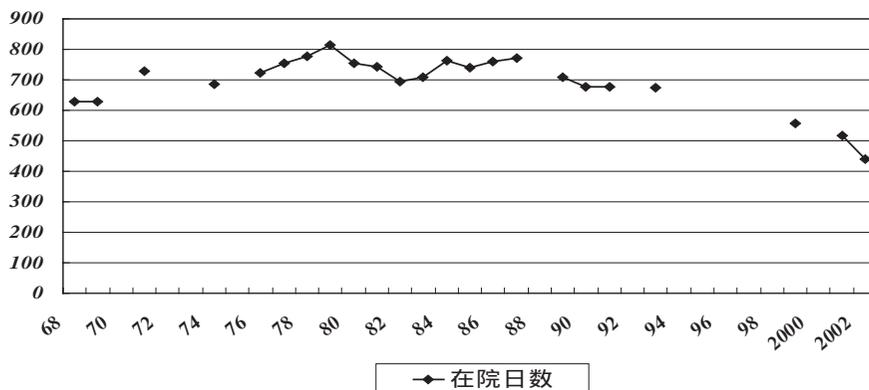


図 2 長崎の精神科病院における平均在院日数の推移

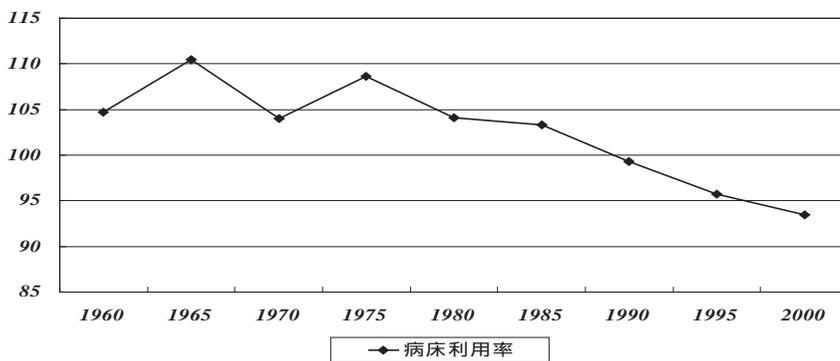


図 3 長崎における病床利用率の推移

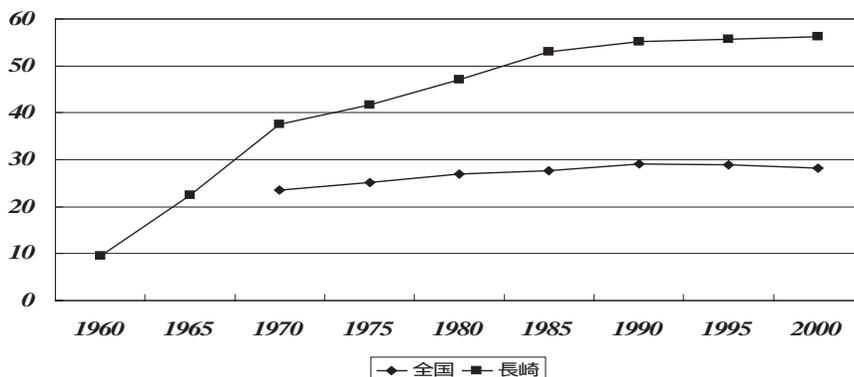


図4 日本全国と長崎の人口万対病床数

たのであろうか。長崎の精神科医療に関するハードの面が充実していること自体は歓迎すべきであろうが、実際はその内容が問われるべきであることも事実である。ここでは、長崎県における精神科医療の全般について広く言及するゆとりはなく、まずはその展開に大きく寄与した故石田昇教授の足跡をたどりながら、若干の考察を試みてみたい。

2. 西洋医学への窓としての長崎

長崎が、西洋医学の導入に大きな役割を担ったことは周知の事実である。確かに蘭学に数多くの関心を持つ者が長崎に参集してきて、一躍オランダ医学を中心に、西洋医学が国内各地へと伝搬していったものである。代表的な人物とされるシーボルト(Phillip Franz von Siebold)は文政6(1823)年に渡来して鳴滝塾を開き精神病学を伝えたとされ、安政4(1857)年9月に来日したポンペ(Lidius Cathalinus Pompe van Meerdervoort)は同年11月12日に医学伝習所を開き(長崎大学医学部創立記念日となっている)そこで「てんかん」について講じたという。

明治時代に入り、ポンペが開いた医学伝習所と養生所(病院)は長崎府医学校と改称され(図5)明治4(1871)年に文部省所管の長崎

医学校に代わり、明治8(1875)年に長崎県病院がおかれ、明治15(1882)年には長崎医学校から県立甲種医学校に発展し、明治21(1888)年には第五高等学校医学部となり、明治34(1901)年に長崎医学専門学校となった。さらに、大正12(1923)年4月には長崎医科大学に改編されて、戦後の昭和20年に現在の長崎大学医学部となったのである。従って、ポンペが開いた医学伝習所・養生所を医学部の開基とする。

長崎の医学史家として著名な中西啓はポンペのイボコンドリ(心気症、Hypochondrie、神経症圏障害の1型)治療例に関する記載をも紹介しており、長崎においてはかなり早い時期から従来の漢方医学とは異なる精神疾患の治療論が話題となっていたことが分かる。とはいえ、精神医学、当時精神病学と呼称されていたものは、医学校や第五高等学校などで長いこと内科の一分野として認識されていた。幸いに精神神経学分野に高い関心を寄せる医師に恵まれた。例えば、明治17(1884)年に熊本医学校の教諭に任ぜられていた東京出身の医学士大谷周庵(図6)は、内科学や診断学を講義するなか精神病学・神経病学についても研究を重ね、長崎に着任する1年前の明治20(1887)年には肺ジストマの虫卵による嚢腫が原因で生じた「ジャクソンてんかん」(症候性てんかんの1

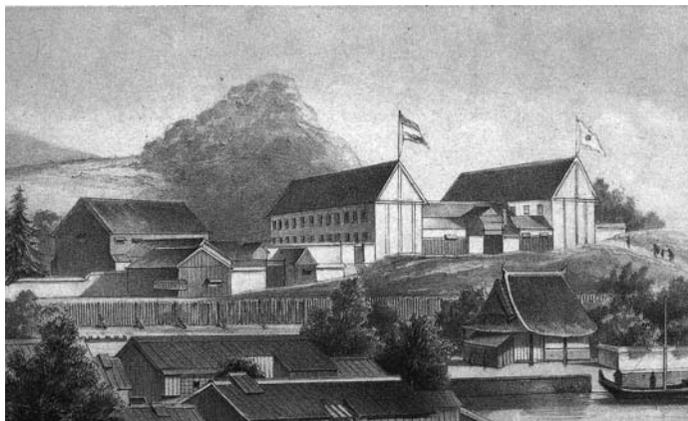


図5 開院当時の小島養生所（ポンペ著「日本における5年間」所収）



図6 大谷周庵（長崎大学医学部所蔵）と呉秀三（神経学雑誌）

型)列に関する綿密な研究成果を報告しており、長崎医学専門学校に赴任後には医学博士になった。この大谷周庵は、長崎の浦上に設置された第五高等中学校医学部教諭（のちに教授）および長崎病院内科医長に明治21年4月に任せられると、内科学一般を講義しながら、「失語症」「片麻痺」「精神鑑定例」などの論文を報告して、医学生への精神神経学講義を行っている。明治36年に日本神経学会が創設されるや同学会会員になっており、彼の影響を受けて数名の者が長崎から会員に登録されたとの記載を見ることも出来る。ただ残念ながら、当時の精神科医療の状

況に関する記載を知ることは出来ない。

3. 長崎医学専門学校における精神病学のスタート

長崎医学専門学校がスタートしたのは明治34年であったが、当時は内科教授であった前記の大谷周庵が医学部4年次学生に精神病学の講義を続けた。当時の教諭は、大谷だけでなく多くの者が幾つかの医学診療科の講義を兼務しており、彼大谷は当初外科学を担当していたが内科学・診断学・細菌学そして精神病学を講義したという。講義すべき分量が最近よりは少なかつ

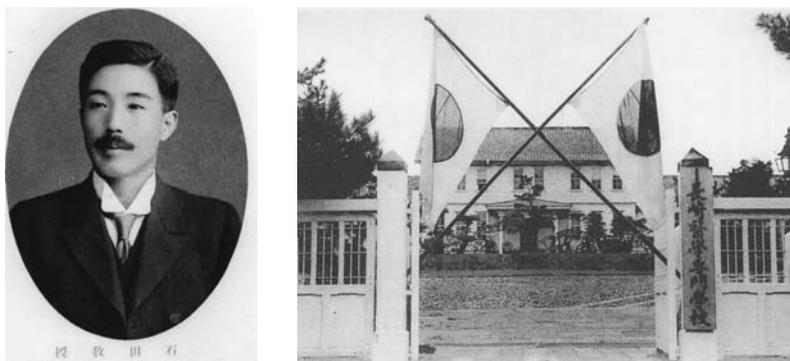


図7 石田昇（大正3年卒業アルバム）と長崎医学専門学校正門（長崎大学医学部所蔵）

たかも知れないが、やはり容易なことではなかったように考える。今では医学博士の数も相当になっているが、明治21年頃にスタートした医学博士はかなり長い間極めて少なく、長崎医専ではしばらく大谷だけであった。彼はドイツに留学して帰国後も長崎医専の学部長や長崎県医師会の副会長職についたりして、のちに東京に戻って待医を務めていた。

明治36年に東京帝国大学医科大学を卒業した28歳の石田昇（仙台出身）は、すぐに東大の精神病学教室に入局した。最近の大学医学部では、教室（医局、研究室などとも呼称する）は大学病院内にあるのがふつうだが、当時の東大精神病科教室は大学から離れた府立巢鴨病院にあった。したがって、医局員はふだんは巢鴨病院にあって、精神病学に関する診療や研究を行っていた。

石田が入局した当時は、呉秀三が東大精神病科の第2代教授であった。呉秀三は、精神医学の父ともいわれるドイツのエミール・クレペリンのところに留学して帰国したばかりの38歳であり、そのせいか研究室は全体的に活気に満ちあふれていた。石田は、大学卒業前まで、詩歌や小説を書いて楽しんだりドンキホーテを翻訳出版したり、文学者（雄島濱太郎のペンネームで）として活躍していたが、入局後は少壮の精神科医として努力し、30歳そこそこの明治39年9月に「新撰精神病学」という教科書を出版す

るに及んだ。同書は極めて好評で、半年も経たないうちに第2版の出版に至っている。その後、同書は大正11年まで度々改訂を繰り返すことになる。

明治40年7月22日に「東京帝国大学医科大学助手 石田昇 任長崎医学専門学校教授」の辞令を受けて、31歳の石田昇は妻「秀」と長男「新」を伴って同年7月26日長崎に赴任してきた（図7）。長崎大学精神医学教室の初代教授の着任であり、まさに長崎における精神病学の診療・研究そして教育の新たな幕開けである。

4. 石田昇による精神医学・医療の展開

彼が長崎に赴任したとき、長崎医専には既に16名の教授がいて充実しているかのように映ったが、実は市立伝染病院内の数室を精神科病室に借りて診療する有様であり、巢鴨病院で研鑽してきた精神科医療を実践するには必ずしも満足できる状況になかった。

赴任して6年後の大正2年になって、彼は自らの構想で長崎県病院に20余名の入院可能な精神病室の建設を計画し、同年11月28日に落成された。この日が長崎における公立精神科病棟の創立記念日である。

ただ同じ頃に長崎市医師会会員であった開業医の内科医大橋純は、「大橋脳脊髄病院」を経営していたが、大正元年に本格的な精神病院の建設を思い立って、県病院精神病室新築から1

ヶ月後れた12月26日に「浦上脳病院」を開設したのである。ただ、この大橋純の活躍や「浦上脳病院」のその後に関する資料は殆ど不明なままであり、民間精神科病院のスタートとは思われるものの、その後の民間精神科病院の発展に如何に繋がっていったかを確認できない。

一方、石田昇によって新築された県病院精神科病室では、巢鴨病院以上に最新の精神科医療が実践され始めた。長崎に赴任して米国留学を前にした大正6年3月に改訂出版した新撰精神病学第7版の緒言は、その雰囲気以下のように記す。

「ピネル百難を排して精神病者の無強制々度を創始してより茲に125年を経たり、爾来病室の構造は牢獄の域を脱して漸次普通病院に接近し来り、閉鎖より半開放に、半開放より更に進んで開放制度に推移せむとするの趨勢に達せり。

予は将来に來らむとする時代の新潮流を觀望して、小規模ながら我長崎病院の一角に純然たる開放式制度を実施し、茲に三歳有餘の日月を経たり。蓋し、本邦に於ける最初の試みにして、窓戸を保護せず、周囲に障壁を廻らさずと雖も、今日の進歩せる療法を以て之に臨む時には、何等の支障あるを見ず。却って患者の病覺と社交心を刺激し、治癒輕快率遙かに従來の閉鎖式病棟の右に出るものの如し。躁暴なる患者を、開放病室に収容するは一見危険の觀なきにあらざれども、却って之を以て得策とし、必要とする理由は、患者入院後一定時日を経て鎮靜し、幾分の觀察眼と判断とを以て身邊を見廻す際に、当然起り來るべき心理状態に想致せば自ら明ならむ。十分なる日光と新鮮なる空氣と最大限度の自由とを与ふるは、患者の言行を緩和し、思慮を加へしむる所以にして、純然たる開放式病室は蓋し如上の特長を具備する所の理想的制度と見做すを得べし。予の病棟に未だ一人の自殺者なく、時に逃亡者なきにあらざれども、何等重大事件を惹起したる例なき、敢て異と

するに足らず聊か病院療法に関する本文の足らざる所を補ひ、以て序となす。

本書新に監獄精神病を加へ、所々分類を変更し、病型を詳叙し、挿図を増加し、且つ索引を添附せり、是れ読者諸子の好意に戻らざらむとするの微志のみ。(大正六年三月) 著者 識」(句読点を一部追加修正)

その記載は自信に満ち、如何にも意気揚々としている。1973年に精神障害者を鉄鎖から解放したフィリップ・ピネルをたたえ(世界保健機関に画家 Robert Fleury による開放の図が掲示されているが、その原画コピーを図8のように既に彼の第6版に収載している) それに負けじと開放的な無強制主義医療の実践が充分にうかがえる。同教科書の中には、長崎での精神科臨床の様子が数葉の写真で見ることができる。ピネルに係る絵画を掲載してきたこと自体、日本で最初だったと考えるが、同じ第6版(大正4[1915]年発行)では日本で始めて分裂病(原語; Schizophrenie)という訳語を紹介している。この精神分裂病は90年近く国内で活用されたが、2002年夏から「統合失調症」という用語に呼称変更されている。

彼は、この華やかな活躍を前提に、米国の精神病院運営を詳しく調査し、作業療法等を含め精神障害者のケアの方法および精神医学一般を研究するべく、アメリカ合衆国に渡った。大正6年12月3日に横浜を發つて、米国 Maryland 州 Baltimore の The Johns Hopkins University に単身で国費留学したのである。同じ船には、千葉医專精神病学の松本高三郎教授、東北大学医学部衛生学の酒井光次助教授、後に高良武久(慈恵医科大学精神医学教授となった)と結婚する和田(高良)とみなども同行しており、彼らは在米中にも親交を深めていた。

ジョン・ホプキンス大学は、当時すでに米国内でも精神医学・医療において指導的役割を果たしており、日本から多数の精神医学者が石田の留学前後に出向いていた。それは、Adolf Meyer 教授の力動精神医学・精神生物学・精神

衛生活動の主唱など迫力ある創造性と強力な指導力によっていた。石田は留学する1年前に米国の精神医学会誌に自らの論文を投稿し掲載されていたこともあり、現に留学した時には米国の学会で歓迎され、日本最初の名誉会員に推薦されるほどであった。留学先でも大いに厚遇された模様である。

5. 石田昇悲運のはじまり

米国バルチモアに到着後、大正7年1月から早速ジョン・ホプキンス大学の Henry Phipps 精神科クリニックと The Sheppard and Enoch Pratt Hospital に身を置いて研鑽と実践を積みはじめた。いずれにおいても、彼についての評価は高いものであった。単身での留学は淋しくないかホームシックになりはしないかなどと周囲から問われると、「ホームシックを治すためにアメリカへ来たのだ」と煙に巻くほどであったという。しかし、大正7年の秋に入る頃から、彼の精神状態に不安定の嵐が吹き始めた。

大正7年12月21日の午前9時過ぎ、ヘンリ・フィップスクリニックでスタッフ会議から途中退室していった同僚精神科医の George B.

Wolff 医師を、石田昇は追いかけて行って射殺したのである。それ以前から、彼は精神的に明らかな被害関係妄想にとらわれていた模様であり、翌年に入って開始された裁判では精神鑑定が行われ、恐らく心神喪失の判定が下されるであろうと思われていたにも拘わらず、犯行当時には異常状態になかったとか精神鑑定を依頼された精神科医がそれを拒否するなどのことがあって、結局終身刑の有罪判決が下され、メリランド刑務所に投獄させられてしまった。その後、精神病性症状の悪化が目立ってきたため、大正14年冬に帰国を許され、彼が若い頃に勤務したことのある都立松澤病院（旧府立巢鴨病院）に入院し、昭和15年5月31日に結核にて死去した。享年64歳。Wolff 医師殺害に関しては、石田昇の精神病状態が原因であることは明らかであったが、当時の日本に対する世界的情勢や米国内での被害者に対する心情などが影響して有罪とされて、帰国後も治療が継続されたが、精神病状は改善せぬまま死を迎えることになってしまった。

彼が日本に送還されてすぐの頃に、妻は心労のため病氣療養中であり、長崎大学医学部を中



図8 病院で患者を鎖から解放するように命じる精神病治療の改革者
フィリップ・ピネル (1795 by Robert Fleury)

心に支援の手段として「石田昇学士慰藉金募集」などが計画されたが、十分な援助を実行できないうちに不帰の人となってしまった。

6. 石田昇の功績

現時点でも活用されることの多い精神疾患の分類体系を確立したエミル・クレペリンの精神病学論を教科書に採用して国内に広く普及啓発したこと、特に長崎に赴任後は巢鴨病院で経験した患者への開放的処遇の実践や新しい治療法の開発、そして作業療法の実践をおしすすめ、いわゆる精神障害リハビリテーションの方向性を示唆したこと、などが石田昇の寄与としてあげられよう。日本最初の試みを数多く長崎の地において行っていたことは、今一度入念に探られるべきであろう。特に、そうした精神科医療革新の芽が、その後の長崎に如何に受け継がれていったのか、もっと検証されるべきと考える。

石田昇が死去して、約45年を経過した今日、長崎にあって精神医療福祉に関わろうとする者は余りに長い時間差から、到底彼の寄与に関心を寄せないかも知れないが、後輩の一人として残念に思うことしきりである。

参考文献

- 秋元波留夫：日本の精神医学100年を築いた人々 第1回 悲運の精神医学者 石田昇，臨床精神医学 13(4)：455-470，1984。
- 秋元波留夫：99歳精神科医の挑戦（三章 人生模様 石田昇と蘆原将軍），岩波書店，東京，pp 63-74，2005。
- 岡田靖雄：石田昇『新撰精神病学』の第1版から第9版まで その内容の変遷，精神医学史研究 2：27-33，1981。
- 宿輪亮三：医師会史資料ノート 県立長崎病院初代精神科部長石田昇と斎藤茂吉（その1 石田昇），長崎市医師会報 237：14-19，1986。
- 宿輪亮三：医師会史資料ノート 県立長崎病院初代精

神科部長石田昇と斎藤茂吉（その2 斎藤茂吉）
長崎市医師会報 238：26-33，1986。

長崎大学医学部：長崎医学百年史，藤木博英社，長崎，1961。

長谷龍太郎：Occupational Therapy の接点を失った悲劇 74年前の殺人事件 作業療法ジャーナル 27，464-467，1993。

小酒井不木：I君の殺人，文藝春秋，1925.06。

・石田昇の著作

石田 昇：新撰精神病学、第一版～第九版，M39-T11，南江堂書店，東京，1906-1922。

石田 昇：健康なる精神 精神病予防法，東京南山堂，1913。

石田 昇：新撰催眠療法，全，南江堂書店，東京，1917。

雄島濱太郎（石田昇）：世界奇書ドン・キホーテ，東京育成会，東京，1902。

雄島濱太郎（石田昇）：短編小説集，昭文堂，東京，1907。

・石田昇の代表的な論文

石田 昇：多数ノ強迫観念及ビ強迫的幻覚ヲ有スル一患者例，研瑤会雑誌 101：1-10，1911。

石田 昇：鑑定書（類破瓜病），研瑤会雑誌 109：21-31，1913。

石田 昇：臨床講義 躁病状態，研瑤会雑誌 114：31-37，1914。

石田 昇：米國の日用英語，研瑤会雑誌 141：114-117，1918。

Noboru Ishida (Professor of Psychiatry, Nagasaki Medical College, and Chief Alienist to The Nagasaki Prefectural Hospital, Nagasaki, Japan.): Results produced in dementia praecox or so-called "endogenous dementia" by the infusion of sodium chloride solution. The American Journal of Insanity 73, 541-547, 1916-17 [1917].

石田 昇：論説 早発性痴呆即ち所謂「内因性痴呆」に施したる食塩水注入の価値，医事新聞 977，865-872，1917。